感情の表出と偽装の使い分けに関する子どもの理解

二次の心の理論との関連

○林 創¹・潮海侑紀² (非会員)

(¹神戸大学大学院人間発達環境学研究所・²たつの市立龍野小学校)

キーワード: 表出ルール, 二次の心の理論, 児童期

Children's understanding of selectively expressing or concealing emotion

Hajimu HAYASHI¹, and Yuki SHIOMI²*

(¹Graduate School of Human Development and Environment, Kobe University, ²Tatsuno Elementary School)

Key Words: display rules, second-order theory of mind, childhood

問題と目的

これまで表出ルール (display rules) の理解の発達には、「本当の感情を隠し、偽った感情を表出する」タイプで多くの研究が行われ (e.g. Gnepp & Hess, 1986; Harris et al., 1986), 言語的/非言語的の両方の表出ルールで, 児童期に明確な理解が進むことが報告されている (Broomfield et al, 2002; Naito & Seki, 2009)。しかし私たちは、「あえて (ネガティブな) 感情を表出する」(e.g., Ekman & Friesen, 1969; Matsumoto, 2009) こともあり, 相手の嫌な行動をやめさせようとしたりする。このように「人は状況に応じて, 選択的に感情を隠したり, 表出したりする」ということを子どもは何歳頃から理解しているのだろうか。本研究では, 児童期を対象にこの点を検討する。

また, 表出ルールの発達は, 二次的誤信念課題との関連が多数報告されている (e.g., Naito & Seki, 2009)。しかし, 「主人公は相手に, 自分の本当の感情を 知ってほしい」(本心を伝えたい状況) のか, それとも「知ってほしくない」(向社会的状況) のかという二次的意図の理解も重要と考えられ, この点も検討することで, 二次の心の理論との関連がより明確になるはずである。本研究では, これを2つ目の目的とした。

方 法

参加者 公立小学校の1年生70人, 3年生80人, 5年生64人, および大学生71人の計285人を対象とした。

課題 (A) 発話表出課題 先行研究 (e.g., Banerjee & Yuill, 1999; Naito & Seki, 2009) を参考に, 4コマのイラストによって, 主人公が他者の行動によってネガティブな感情を抱く4つのストーリーを作成した (例: 主人公は, 以前はチーズが好きだったが, 今は嫌いである。クラスの友人はそのことを知らず, チーズをわざわざ取りに行き, 主人公にあげてしまう)。そのうち, 2つに「向社会的状況」(例: 主人公は友人に嫌な思いをさせたくない) を, 残りの2つに「本心を伝えたい状況」(例: その友人は, 物をあげるのが好きで, いろいろな物までくれるので, クラスのみんながうんざりしている) を表示情報を付与した (予備調査で状況操作を確認済み)。

質問として, (ストーリーの理解に関する) 「①確認質問」, 「②本当の感情質問 (主人公は, 今どんな気持ち?)」, 「③発話質問 (主人公は, 友人に何と言う?)」, 「④二次的意図質問 (主人公は, 友人に自分のことをどのように 思って ほしいか?)」を行った。②~④の選択肢は「嬉しい」「怒っている」「悲しい」「何とも思っていない」(発話質問では, 4つの感情を伴う発話/予備調査によって確認済み) の4つで統一した。

(B) 二次的誤信念課題 Sullivan et al. (1994) の課題を参考に, 5コマのイラストによって作成した。

手続き ストーリーの順序を変えた2種類の調査用紙を作成し, クラスごとに割り当てた。小学生はクラス単位で, お話と質問を順に読み上げ, 児童全員が同時に進めるようにした。大学生にはランダムに2種類を配布し, 個人のペースで進めてもらった。

結 果

(A) 発話表出課題 各状況の2つのストーリーで, ①確認質問と②本当の感情質問 (「怒っている」または「悲しい」を正答とした) に誤答だった者を除外した結果, 分析対象は, 1年生が45人, 3年生と5年生が56人, 大学生が69人となった。③発話質問と④二次的意図質問の各々で, 「怒っている」または「悲しい」というネガティブ感情 (発話質問では, ネガティブ感情を伴う発話) を選んだ場合, 「ネガティブ感情選択得点」として1点を与えた (各状況で2点満点)。

発話選択と二次的意図の結果 ③発話質問の平均を, 図1に示す。学年×状況の2要因分散分析の結果, 学年, 状況, 交互作用のすべてが有意だった ($F(3, 222) = 15.02, p < .001$; $F(1, 222) = 118.06, p < .001$; $F(3, 222) = 18.44, p < .001$)。④二次的意図質問でも, 2要因分散分析の結果, 学年, 状況, 交互作用のすべてが有意だった ($F(3, 222) = 7.29, p < .001$; $F(1, 222) = 54.89, p < .001$; $F(3, 222) = 14.83, p < .001$)。多重比較の結果, 3年生以上で2つの状況に差が生じ, 向社会的状況では, 学年が上がるにつれてネガティブ感情を選ばなくなるが, 本心を伝えたい状況では, 1年生から3年生にかけてはネガティブ感情を選ぶ傾向が減り, 5年生から大学生にかけて増すという, U字型の発達を示した。

図1 ③発話質問の結果

二次的意図と発話の関連 ④二次的意図質問と③発話質問の相関を算出した。1年生は各状況で相関は有意でなく, 3年生以上では各状況で有意であった。

(B) 二次的誤信念課題 正答率は1年生が77.1%, 3年生と5年生がともに93.8%, 大学生が95.8%で, χ^2 検定 ($\chi^2(3) = 18.01, p < .001$) と多重比較の結果, 1年生のみ正答率が低かった。

二次的誤信念と発話表出との関連 向社会的状況と本心を伝えたい状況のいずれも, 二次的誤信念課題の正答者の方が, 誤答者より, 発話表出課題の③発話質問で, 各状況に適した感情を伴う発話を選択する傾向が見られた。

考 察

以上より, 6~7歳頃 (1年生) までは, 人は状況と関係なく本当の感情を示すものだと考えがちであるが, 二次の心の理論の発達とともに, 8~9歳頃 (3年生) から, 「人は状況に応じて, 選択的に感情を隠したり, 表出したりする」ことを理解し始め, 10~11歳頃 (5年生) には, この理解が明確になるという発達の過程が明らかになった。